
秩序現実崩壊学園

普通一般平凡人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秩序現実崩壊学園

【Nコード】

N9110E

【作者名】

普通一般平凡人

【あらすじ】

くしゃみが砲撃のような女、平凡な男、メガネによって性格が左右される女、うるさくて空気を読まない男など。多種多彩なキャラが存在する学園の物語。

No.1 花粉症には気をつけたい（前書き）

この小説は趣味で書いていますので、若干小説っぽくないかもしれませんがご了承ください。

No.1 花粉症には気をつけたい

桜が舞い落ちるのを確認できるほどの視野を持つ僕です。何か悪いのですか？ 大丈夫ですよ？

そして、僕は独り言でこう言ってしまったのを教室に入り、自分の机の位置を確認して片手で鞆を机の上に置いて、椅子の位置を確認せずに座ろうとしたときでも覚えています。

「春っばいなあ」

桜がいくつも舞い落ちているので当たり前と言えば当たり前ですが、春の小春日和がなんとも・・・え？ 何か間違ってる？

そんな中、学校の通学路を歩いているときに、何か不自然な音を聞いたのです。気のせいだと思ったかったです。

そう、それは一瞬だけ風が吹いたとき、女子生徒はスカートを抑え、男子生徒は前髪を確認し、その後に音が聞こえたのでした。

「へっくドン！！」

この声が、これから始まる高校生活に希望と不安を抱えながら歩いて登校していた僕の背後でしたのです。途中まで聞くとかしゃみに聞こえますが、その後の音はくしゃみでは済まされません。

爆音でした。前から吹いたそよ風が、背後から勢いよく爆風に二段階進化して、僕達を襲ったのでした。静寂が爆風と協力して登校している生徒を襲いました。

気になった僕は、後ろを振り返ります。

穴が空いていました。何かをそこで爆発させなければ起きることの無いはずの爆発の後でした。え？ 違う？ 跡？

「ズビー・・・」

口で言わなくていいはずの擬音を、表現し、目の前の爆発の跡を何とも思わないで進んでくる女子生徒。

あっけに取られていた僕が、我を取り戻して彼女に声をかけたその瞬間です。彼女がこちらを振り向いた瞬間です。

「へっく・・・」

「あ・・・！」

とっさの判断で僕は右手を口に持っていき、彼女の発射口を封じたのです。封じた・・・つもりでした。

「ぶうん!!」

彼女が女性とは思えない声を出して、頭がロデオの状態のように前後に揺れた瞬間でした。

「それで、右手を怪我したって言うのか」

「・・・先生。右手を怪我したと言うよりは、右手が潰された感覚です」

僕の右腕は包帯ぐるぐる巻きに変身したのです。

No. 2 入学式に必要なのは校長と生徒と教師（前書き）

趣味で書いてます。小説というよりは短編集。

No.2 入学式に必要なのは校長と生徒と教師

「先生。僕、こんなので入学式出れませんよね」

「出れるぞ」

「へ？」

「さあ、早く。皆も並んで」

砲弾に巻き込まれた右腕の包帯を気をつけて運びながら、皆と並びます。気になります。

体育館に着きました。体育館とは思えませんでした。至るところが崩壊寸前です。ねずみというより虎、もしくはライオンが入れそうな穴がいくつも空いています。人工的には言いませんが、日常的にこんな穴が空くことが無いので、皆引いていますが、僕は似たような光景を朝見ているので、嫌なことを思い出しました。

思い出したくなくても思い出しました。

靴箱すら崩壊しており、先生が「土足でいいぞ」と言っているのに、ふざけて靴箱っぽいものに靴を入れようとした生徒の目の前のそれが崩壊したのも僕はスルーしました。その生徒は当たり前のことですが靴を失いました。

「遅れてすみません」

先生が大きな声でそう言うと、天井が少し揺れるのを感じました。危機的状況であるとその場にいた全員が悟れたはずです。

「ええー、それでは一年生がそろったところで入学式に移りたいと思います」

校長先生であろう人がステージの上で、僕達がパイプ椅子に座るタイミングを計り、そうしてしゃべり始めたその時です。大変なことが起きました。

「それでは、今年の新入生を歓迎して校歌を歌いたいと思います」

「校長先生、それは無理です」

教頭先生が拳げなくていい右手をきれいに拳げて、そう言った。

校長先生は「そうですね」と平日のお昼の番組の観客のようにつ
た。だから、こんなことが起きたのだ。

突然、目の前がまっくらになった。

「先生、何でこんなことになったんですか」

「築250年はやばかったか」

瓦礫の下のやり取りです。

N o . 3 地雷・くしゃみ砲撃型（前書き）

趣味で書いてます。その辺ご了承ください。

No.3 地雷：くしゃみ砲撃型

No.3 地雷：くしゃみ砲撃型

右腕包帯ぐるぐる巻きのクラスメイトが瓦礫の下から先生と一緒に出てきた。

みんなが先生と彼を待っていたはずなのに、先生はそれこそまだ、先生の威厳が残っているとも思い、こう言った。

「皆いるかー」

新品であろうシャツが真っ黒になり、しわがめちゃくちゃつき、最悪な状態になった先生が点呼を取る。合ってる？

体育館が崩れて、救急隊がやってきて現在行方不明者捜索中です。幸いにも教員全員がいた。この場合、校長先生も教員に入れて、張本人も助かっている。

行方不明者は全校生徒のおよそ3割。救急隊の捜索が届かない位置にいる生徒はどうすることもできない。

先生が大声で叫ぶ。

「あれ？ 山下はどうした？」

「先生、まだ自己紹介してないんで山下と言われてもピンと来ません」

同じクラスの生徒がそう言うと、先生はありきたりな困った表情でこう言った。その声には少し余裕が感じられたが。

「そうかぁ・・・非常に心配だな」

「・・・えー」

「ん？」

クラス全員が聞き取れるほどのかすれた何か。声でありそうな気がするが。皆聞いたことの無い声で、辺りを見回し、気のせいだという奴もいれば、行方不明者だと騒ぎ立てる奴もいた。先生は皆に静かにと注意するが、先生本人が慌てている。

先生本人が慌てている中、もう一度何かが聞こえた。

「・・・けてえー」

今度はさっきより大きな声。ありきたりな展開だが、瓦礫が何かに埋もれた中から聞こえる「助けて」という悲鳴だ。この展開がそのまま続けば・・・次にはもっと大きな声が。そう考えた俺は甘かった。

「おーい、大丈夫かー!?」

先生が見えない何かに対して声をかけた。辺りを見回すクラスメイト全員。そして、次の瞬間、信じられないことへのカウントダウンがその本人が放つ言葉で分かった。

「助けてえー・・・あ、あ、むずむずする・・・はっはっ・・・へっくドン!!!!!!」

爆風。

まるで、そこに地雷があつたかのようにその場所に砂煙と共に、爆風が舞い上がる。瓦礫は全て吹き飛び、そこに大きな穴が空いた。そして、その先には――。

「大丈夫か? 山下」

「だいじょーぶです。ズビー・・・」

鼻水を垂らし、真っ黒な顔した女子生徒が背中にパイプ椅子を乗せて、倒れていた。

No.4 自己紹介で必要なのは名前と誕生日と血液型。お好みで星座もどうぞ

これまた恒例の趣味で書いてますよ宣言をします。そして、今回は
ちよつと長い・・・？

次の日。

包帯ぐるぐる巻きの奴が、安静にしておけと言われて俺の席の左隣にやってきた。そして、極めつけなのが・・・。

「よろじぐー」

その反対側の席の、思いっきり鼻声で、恥ずかしさというものをどこか別の世界に置いてきたかのように、さわやかにこちらに挨拶を飛ばしてきた。机の上に鞆を置き、椅子に座ろうとして寸前で止めて、なぜかこちらを向いてロデオの馬みたいに前後運動を始めたと思いきや・・・。

「へぐじゅー!!」

今まで聞いてきた砲弾のようなくしゃみではなく、我慢したいと願うてのそのくしゃみは、彼女の発射口の大きさを収縮させて密度の高い何かが、まるで銃弾のように俺をスレスレで通り過ぎた。肩の上、顔の横を通り過ぎたその弾丸は教室の床に直撃し、どうしたらそんな煙が出るのかと思うほど、煙が立ち上っていた。

摩擦熱？ いやいや、というより・・・。

銃弾か何かですか？

「ほらー、席つけー」

教室の扉が開いて、先生が入ってきた。そして、見知らぬ女性を後ろに連れて。みんなが騒然とする中、先生は「はい、静かにー」と注意した。そして、ゆっくりとこう言った。

「皆に質問する。私のことを担任だと思ってる人、手を挙げて」
皆が一斉に手を挙げた。

「実は違う」

皆は手を挙げながら、呆然とした。開いた口がふさがらない人がクラスの100%の比率で存在していた。

「この先生が担任だ。では、先生」

「はい……。えーと……。私の名前は斉藤由美っていうところまで派手でも珍しい名前じゃないですけど、覚えてくださいね。教える教科は数学です」

はい。皆がそう返事をした。一応ここは小、中の次の段階の高校なのだが……。

「えー、私が副担任の富士大和だ。教える教科は理科だ」
はい。こっちは元気が無かった。

「それでは……。えーと、自己紹介の時間を取りたいですが、それぞれ個人で済ませてください。この時間をフルに活用してがんばってください」

がんばるって何を？ 自己紹介を？ 大会か何かですか？

一斉に首輪を外された犬が暴走し、辺り一面を駆け巡り、花畑で陽気にダンスでもしているかのように教室が騒がしくなった。笑いが聞こえたり、罵声が聞こえたり、ビンタが聞こえたりと……。騒がしかった。

とりあえず、隣のくしゃみをする女に話しかけようとした。すると……。

「へ？ へっ……。へっ……。へ」

「わああああー！」

発作的に大声を出して、止めようとした。運が良かったと言いたい。それで止まったからだ。かなり目を丸くして驚かれたが。

「あ、ありがとう」

「……。えーと、君……。名前は何？」

「わだじの名前は、山下紫^{やましたゆかり}。むらぎぎでゆかり。あなたは？」

何か、もう一度来そうなので、確認して相手がだいじょーぶと答えたところで自己紹介を始めた。

「俺の名前は右左団子。うさだんご。みんなからウサ男って呼ばれてたから、そう呼んでくれればいい」

「ウサ男」

「背後から自己紹介した覚えの無い奴に呼ばれる筋合いはないぞー

「!!」

「僕の名前は」

今度はこっちがびっくりした。右腕ぐるぐる包帯巻きの左隣の奴だった。何かぎりぎりな山下の様子を確認して、俺は「OKだ」と言つて、自己紹介を進めた。

なかのかわいさむ

「中乃川勇。まあ、登校中にその子の口に手を当てたらこうなった」ぐるぐる包帯巻きを見せてきた。もう少し丁寧に巻いてあればいいのと思ったその瞬間、不意に聞こえたその声で、咄嗟に頭に浮かんだのは先ほどの瓦礫の光景だった。

「よろじぐ・・・へっ、く!」

「マスクしろおおお!!」

次の日。

「・・・はよう」

「へ?」

隣の席から声が聞こえたと思ったら、くしゃみ女の山下だった。しかし、昨日とは違いマスクをしている。

そして、例によって例のごとく。

「へっへっへ・・・べっくぼん!! スピー・・・」

マスクのせいで籠ったくしゃみは、マスクを信じられないほど彼女の口から離して、マスク自身は持ち前の弾性で元に戻った。

No.5 小さいのがいるときは騒ぎ立てるな(前書き)

趣味で書いてますよ、っと。後、今回長すぎます。ちょっと長くなりましたね。

No.5 小さいのがいるときは騒ぎ立てるな

右手がまだ完治しないまま僕は教室に入った。

外の景色は瓦礫の山が全てを支配しているようだった。そこには、危険立ち入り禁止というそれすらも古い看板が立っていた。何か落し物でもしていない限り、入るはずの無いところを立ち入り禁止にしても意味は無いと思うし、べつにそこまでして入りたいとも思わない。

そして、席に座ろうとしたとき、右側の席一つ分飛ばしてマスクをしている女子がいた。

彼女はくしゃみをする、砲撃のような衝撃波が発生するという特殊な能力の持ち主だった。その「おかげ」で、僕の右腕は包帯ぐるぐる巻きミイラとなった。困った。両利きでよかったけど。

「おはよー」

元気な少年をよそつてみたが、彼女からの視線は何だか白い目線だった。

死んだような目をしている彼女の白い目線は、かなりの喧嘩をバ―ゲンでもしているかのような大安売りしている感じだった。普通の人なら、ここで怒るだろう。しかし、僕は怒らないのです。

だから、こうするのです。

「大丈夫？ 鼻」

彼女の頭に怒りの印が浮かび上がったような気がしたのです。

「人が気にしていることを何の抵抗も無く言うなあああ！！」

彼女の死んだような目は鋭い眼光に変貌し、気のせいか髪の毛がオーラをまとい、ふわふわと浮かんでいるような……。いやいや、そのオーラは負のオーラ。怖い。

恐怖だ。だが、僕にはそんなリアクションはできない。

「え、えええ！？」

「今この一時だけでもマスクを外してあなたに向けてぶち込んであ

げましょう！！　それが私からの感謝のいっぱい詰め込んだ贈り物です！！」

「いりません、いりません！　お歳暮でもいりません、一週間以内といわずに即日返却です！！」

彼女が手に構えたのは先を細くし、ぐるぐるにした鼻をかむことを普通はするであろうティッシュ。それを鼻に突っ込んだ。そして、ぐるぐるティッシュを無造作に動かし、自らの鼻の中をぐるぐるかき回し始めた。

そして――。

「へっぐじょん、へっぐ、へっぐしゅん、へっぐどん、へっぐぼん、へっぐしょん！！」

「女子生徒が出すくしゃみの音じゃないでしょ！！」

砲撃の連射。教室が完膚なきまで大破していく。立ち上る煙の合間から見えた景色の中で、みんなは既に壁の方に寄っている。避難している。なんとという早さだ。

「ふぎゅらああああ！！！！」

「え？」

「ズビー・・・？」

何か声が聞こえたような気がしたが、煙で何も見えない。教室を完膚なきまでに大破させた砲撃は周りから、この戦場を視界的な意味で孤立させた。だから、何も見えない。分からないです。

「ひ、ひどい・・・わたすがここにいるの・・・に」

気のせいではないその声により、一時彼女の砲撃くしゃみ砲は砲撃を止めた。そして、煙が次第に薄くなり視界が良好になり始めた瞬間、教室の扉がゆっくりと開き、換気的要領でさらに煙が薄くなつていった。

「・・・ん？　なんだここは？　教室か？」

「ふえええ・・・」

「んお？」

そこに現れたのは、山下（砲撃くしゃみ女）にマスクをすること

を強制した男、その名も右左団子。通称ウサ男だった。ウサ男はぎしぎし軋む床を別に恐れることも無く、歩いてみせて、さらにその声の主に近づいた。

その様子をじっと見ていた僕と山下に、その倒れていた女子生徒に会話を繰り広げるのを見せた。

「・・・まさか、山下の砲撃食らったのか？ 食らったらこの右腕みたいになるぞ。大丈夫か？」

「大丈夫。何とか立て・・・る」

「そうかー。ん？ 自己紹介してなかったのか？ こいつは俺の双子の妹の月美だ。右左月美。通称ウサ美」

そして、僕達の二分の一の身長ぐらいの小さな彼女は自分の顔を触り、無いものを探し始める。

「め、めがねが」

「え？ めがね？」

僕は動いたのです。体が自然に。嘘じゃありません、本当です。動いた体がその後、そんな事態を招くとは思ってもよらなかったです。僕の足音は軋む床の音を奏でずに、何かガラスのようなものを踏みつけて粉々なまでに状態変化させたような音を奏でたのです。

目の前で・・・何かが変化し始めました。

「め、が、ね」

「えっと・・・ズビー・・・わだじはじらない」

逃げました。山下が。

「え！？」

「ま、達者でやれよ」

逃げました。ウサ男も。

「ええ！？」

「め・・・が・・・ね・・・割れる音でしょ？ 割れる音が聞こえたわ。気のせい？ 気のせいじゃないわよね。ほら、窓ガラスはあんなにもきれいなよ。割れてなるものですか。めがねじゃないわよね？ あなたの音？ そうよね。あなたの音よね？ あなたが鳴

らしたのよね？」

「ひ、ひい！？」

砲撃の方がまだ怖くないです。

「鳴らしたんでしょ？ あの音を。バキッと。ボキッと。何かをへし折るような。そうでしょ？ ねえ答えてよ。答えなさい。答える。答えて。ねえ、ねえ！！」

「先生。教室に入れないんですが」

俺と山下、そして、クラスのみんなは廊下に立っていた。目の前の扉に立ち入り禁止の文字が大きく書かれていた。

「教室を工事してるんだ。しばらくは課外授業になる」

そこに現れたボロボロの少年。今度は右足も包帯ぐるぐる巻きになっていた。

「で、右足を怪我したのか」

「ウサ男。右足を怪我したと言うよりは右足を潰された感じです」

No.6 テスト前私語厳禁(前書き)

趣味で書いてますんで、その辺はご了承ください。また、一日いくつ投稿するかは分かりません。気分です。

No.6 テスト前私語厳禁

右手が復活し、四体満足状態になった僕です。

メガネのウサ美の超急降下爆撃により、右足が負傷を超えて重傷の状態に持っていていかれています。それでも、左足が使える分は学校には来ますよ。

「・・・」

工事によって直った教室の扉を開け、自分の席へと向かう僕。その隣の隣の人には一切話しかけないということを入学式より誓いました。その誓いは学校の規則以上に守るべき使命のあるもの。絶対の法律と対等だと自分の中ではランク付けされています。

そして、その右斜め前には小さな子がメガネを額にかけて、そう、目にかけて額にかけて席についていました。教科書をじーっと見ながら、小テストに向けて備えているようです。その子が右足を隊はさせました。

そういえば、何だか今日は皆静かに勉強に励んでいます。

隣の隣では爆撃の音かと思うくらい音を鳴らしながら、勉強をしています。ツッコみません。

ツッコんだら負けです。ちなみに右手はこの人が破壊しました。入学式の日。

「勉強というのは日々の努力が響きます！」

「うるせー!!」

「そう、それは運命なのだ。日ごろの行いを懺悔するがいい!!」

「ウサ男静かにしてろー!!」

「おおっと、テスト前で皆イライラしてますね。そんなときはリラックスして・・・」

「だまれー!!!」

クラスみんなが一致団結して、罵声を一齐に解き放つこの団結力。恐らく体育祭とか、すばらしいところで活躍しないであろう、

この団結力。瞬間団結剤が何か使っているのかもしれない。

「……ん？ 中乃川、勉強しないのか？」

「お前の「おかげで」勉強できる状況だとは思わんよ」

隣で爆音。さらにウサ男が騒いでいるので無理だ。勉強ができるはずが無いだろう。右斜め前の小さなクラスメイトが苦にせず勉強をこなしているのが目に入った。勉強のために生まれてきたのか、こいつは。

周りを見回してみると、みんなの頭に怒りの印が若干見えるのをスルーしたい。

「テストが始まるぞー！！」

ウサ男が叫ぶ。

「テスト直前でもうるさいな、お前は！！」

瞬間団結剤の効力により、ウサ男を全員が怒鳴った。

No.7 テスト中くしゃみ厳禁(前書き)

趣味です。短いです。

No.7 テスト中くしゃみ厳禁

相変わらずの鼻がむずむずする中、強化の小テストが開始されました。あれ？ 教科の小テストですね。

ウサ男君がうるさかったようですが、それとは別の理由で勉強に集中できなかった私はこのテストでどれだけ取れるか見物です。

シャープペンシルが紙に字を並べていく音が、静かな教室に響いています。私もそろそろ……。

シャープペンシルを手に取ったその瞬間でした。

「……へつくぼん！」

いつもどおりのくしゃみをマスク内で済ませようと考えて、そのままくしゃみを勃発させたのですが。

「……あれ？」

アホみたいな顔をして、私は自分のテストをよく見ました。テストはマスクの物理的な激突という行動をともに受け、形状変化を起こし、なおかつ……あれ？ 意外と丈夫？

「……ズビー」

アホみたいに鼻水を垂らして、くしゃくしゃのまるで一度ゴミ箱へ作家が投げ捨てるような紙になったテストを開けて、テストに集中しました。

その後も、くしゃみを連発してましたが。

「テストどうだった？」

山下が聞いてきた。相変わらずの鼻声。

「まあまあ、だったな。中乃川は？」

「上の下二段活用」

「国語じゃないぞ。で、山下はどうよ？」

「いや、えーど、くしゃくしゃじゃなかったよね？」

「は？ 何言ってるんだ？」

そういえば、先生が集めてたテスト用紙の中に「わごわのテスト用紙があったような・・・」。

「どうやっでがえっでくるんだろっ」

独り言のようにそう言っで山下はくしゃみを止めなかつた。

N o . 8 テスト中私語OK。ただし点数の保障は出来ません（前書き）

趣味で書いてますによ。

No.8 テスト中私語OK。ただし点数の保障は出来ません

「うちの高校ってテスト中私語OKなの？」

「そうみたいだなー」

「ふむふむ」

小柄で、メガネを額にかけたおかしな女子生徒と、先ほどまでうるさかった男子生徒が話をしている。男子生徒の目の前がその女子生徒の席となっている。教室は先ほどの時間のテストのことで会話が盛り上がっていた。何という勉強校・・・。

「私語したって別に解決には繋がらないからな」

「分からない、その私語そのものを解答にする国語教師がいるかもしれないしね」

「教室が騒がしそうだな」

「へつくどん！！」

不意に聞こえた爆撃ミサイルの音。

俺の隣にある席のマスク女だ。というより私語をOKにしておかないとこいつはテスト開始と共に我慢大会をすることになるだろう。そうなれば、我慢大会の閉会と共に、第一次、第二次世界大戦を超える超爆撃が、この教室という狭い戦場で起こるだろう。それは困る。

「ズビー・・・」という声に出さない方がまだいいような音を彼女は声に出した。

「私語というよりくしゃみが問題な気がする・・・」

「確かにそう思うわ」

「この前のテストを返すぞー」

「！！」

「どうした？ ウサ男。頭に「！！」何か出して」

「中乃川・・・点数が無い・・・」

ウサ男のテストには赤いペンで書かれたであろう字が一つだけ書いてあった。「黙」の唯一つだけの字が。

そして、さらに右側からも同じような声が。

「・・・ぐしゃぐしゃ・・・だからって・・・」

そのテストには「張」という字が。ピンっと「張」れということなのか。

「中乃川」

「うい」

そう呼ばれて手に取った僕のテストには普通に点数がかいてあったのには少し悲しかった。

N o . 9 勘違いというレベルで済まされるうちに恥をかいておけ（前書き）

くだらないパートです。趣味で書いていますよ？

No. 9 勘違いというレベルで済まされるうちに恥をかいっておけ

「鉄コン筋クリート」

「何だそれは」

休み時間に入り、教室がまるで何かの大会でも始まっているのであるかのように、騒がしくなった。当然のことであろう。それでも話しかけてきた左の席に座る右足負傷野郎の言葉だった。

「あれって、鉄筋コンクリートなんだよ」

「・・・何言ってるんだ？」

「え？ ぞうだったんですか？」

右側からいきなり会話に参加してきたハナタレ女子が鼻声であることを無視して話しかけてくる。恥を知らないのだろうか・・・。
しかし、そうではなく。

「え、ええ！？」

「サンタさんは実在するんですね？」

鼻声を何とか治してから（鼻すするという感じで）、そう言った。

「お父さんという解答もある」

そこに別に驚くことなく会話を返す。ここからはカットしないで
会話をお楽しみいただきたい。

「麒麟って、あの首の長いのだよね？」

「ビール瓶を見ることをお勧めする」

「緊張したときって左手に人を書くんだよね？」

「たぶん、全身の容量がいっぱいになりそうだ」

「地球って太陽系の中心」

「ちよつとその説、説いてこい」

「海は一つですよね？」

「歩いてアメリカまで行つてこい」

「ばがでずね、わだじ」

「阿呆だ」

そうして、無駄な時間を過ごした休み時間が終わりを告げ、周りの連中はかなり呆れていた。

「・・・俺は？」

右足負傷野郎は、みんなが「次、技術室だよな」「おう、行こう行こう」という会話を聞きながら、一人教室に残された。

何だか・・・空しくなった今日この頃、と彼は思っていた。

No.10 大決戦!! 部活動存続を駆けた校内宝探し パート1（前書き）

少しシリーズ化します。一応趣味で書いてますよ？

「何か面白い部活が無いかな？」

とある昼休み。ウサ男がまるで独り言のようにそう言った。

「あるわ」

「ウサ美、教えてくれ」

「部部」

「は？」

「部活動を管理する部活動」

信じられねえよ、とウサ男はウサ美に言う。

「生活記録部」

「はっ？」

マスク女である山下がいきなり会話に参加してきた。鼻声ではあるが、濁声にはなることなく聞こえるとおり言葉だった。マスクが毎日毎日新しいのは使い捨てなのかと思ったが、それよりも・・・。

「何打それは？」

「ゴルフじゃない・・・」

「いや、悪かった。どういう部活なんだ？」

「生活を記録する」

「・・・」

呆れたウサ男が山下の顔を見つめる。山下は案外まじめに言ったつもりだったのだ。中乃川はそんな様子を見て、会話に参加してきたいいつものメンバーがそろった。そして、信じられない言葉を発する。

「部活動に入ると、定期的に全校で大会が開かれて、そこに出席して部費が決まるらしいぞ」

「・・・自治性高すぎるだろ」

「さらに、ランクがそこで決まるらしい。春、夏とあって予選があ

る」

「甲子園か、それは」

放課後。

教室ではHRが終わり、皆忙しくさつさと家へと帰りたいと愚痴をこぼす人もいたし、どっか寄って行こうぜという人もいた。教室から生徒の姿が消えようとしていたときに、いきなり使われていないはずの放送が鳴り響いた。

「はっはあー！！　ただいまから部活動存続争奪戦の始まりだあー

！！　新規参入の部活動もOK！！　古参人の方々も勢ぞろいでお迎えするぜ！！」

「・・・本当だったのか」

「本当ですよ」

「し、静かにっ」

山下が軽く会話をしていた俺と中乃川を静かにさせる。放送はまだまだ続く。

「はっはあー！！　制限時間は夜10時！　それまでに校内に仕掛けられた謎を解き明かして、宝玉を持ってきてくれよお！？　宝玉の価値で存続と部費が決まっちゃうからなあー！！　あ、ちなみに体育館は出入り禁止です」

「・・・どうするよ」

「僕は生活記録部に入る」

「・・・マジで？」

俺は中乃川の精神がまだこの世のものであるかを尋ねた。尋ねてみると、なんとなく面白そうだから入りたいという理由をくれた。山下もいつしよに行くらしい。こいつに至っては「そういえば、ズビー。一年生って強制的に入らないといけないんですよ」という知らなかった義務まで教えてくれた。

だから、めんどくさくないところに入りたらしい。そうか・・・。

ふと、気づくと廊下が騒がしい。悲鳴と共に何か地鳴りが聞こえる。すると――。

「君かい！？ 生活記録部に入りたいといった子は」
「ふへ？」

中乃川は新鮮なまでのリアクションを返した。

果たして、中乃川は生活記録部に入るのか。というよりこの人誰だ？

続きは次回！！

No.11 大決戦！！ 部活動存続をかけた校内宝探し パート2（前書き）

趣味で書いてますよ。文法等おかしな点ありまくりな気がしますが、
そういうところを探すことも楽しんでくださいな。

No.11 大決戦！！ 部活動存続をかけた校内宝探し パート2

「僕は生活記録部部长の豚活幸助。この学校で「カツコウ」の異名をとる生徒さ！」

「カツコウ・・・」

なんともいえない自己紹介に、それと同格なほど微妙な異名を宣言されても困る一同だった。静寂な雰囲気 of 教室をぶち壊すように豚活先輩はさらに言葉を飛ばす。

「君と彼女が入りたいんだよね？ うちの学校は口約制だから、入るのも辞めるのも口で宣言すればいいのさ。部活動内の規則も全部口で。逆に言うと、それだけ口に責任持てないと苦しいんだよね」

「・・・」

「ま、入るって聞こえたから入るんだろ？ じゃあ、とりあえずこの校内の第17番目の謎を解きに行こう。場所はグラウンドの隅だ」

まるでマシンガンのような速度で会話を進めていく豚活先輩。会話を飲み込まれていく中乃川と山下。そして、いきなり手をつかまれて、まるでさらわれていくように連れて行かれた二人。まあ、どつちも意味的には同じだけど。

「・・・どうするよ。ウサ美」

「・・・私は部部に入るわ」

メガネをくいつくいつと動かす。別にメガネをかけているとは思えない位置にメガネがあるので、くいつと動かされても不自然だ。

「じゃーねー」

「おう」

というわけで、教室に俺を残すことを別に気にもしない妹が教室を後にし、静寂の塊と同じような教室に俺は残された。

「何ですか、それ？」

「部活動」ことに存在する部室に隠された、部活動所有物とされてい

る宝石だ。毎年、この時期になるとこういう大会が開かれて部活動ごとの所有物の奪い合いが行われる。つまりだ、正当に隠されている宝石を捜すのも良し。不当に部活動ごとの所有物を狙っても良しという大会なのだ」

宝石と呼んだそのカツコウ先輩の右の手のひらには、きらきらと輝く小さな石が乗せられていた。鈍く光るその宝石は、例え小さくとも威厳を十分に持っていた。

「ズビー……。でっことは、あれも……。宝石ですか？」

なんとかくしゃみを堪えようとしているのが丸分かりの山下は、校庭の中心に置かれた巨大な水晶を指差した。三人ともその水晶を注目する。

「うん。あれも宝石だ。部部の宝石」

No.12 大決戦!! 部活動存続をかけた校内宝探し ファイナル(前書き

シリーズ化を無理してました。趣味で書く分には適当に書くのが一番ですよ。というわけで趣味で書いてます。

五月晴れ ほのかに香る フライドチキン どうも、中乃川です。
さて、部費とランクの決まるこの大会の結末ですが、微妙な展開になります。微妙です。お気を確かにしてなるべく離れてみてく
ださいね。読むんでしたか。

そろそろ、9時半を回ろうとしている。大会の終了時刻は10時。
おそらく、何名かの部の代表はすでに宝石を手に行っているのだろう。
この暗い広いウザいの三つの基本の構えを持った校内の謎。生活記
録部と共に、いくつか回ってみたが謎が分からない謎ばかりだった。
特に分からなかったのが、この校内で株の取引をしているのは何人
かと言う違法スレスレの謎だった。もちろん、3人の誰かが分かる
わけもなく、謎は迷宮入りとなった。

さて、どうするべきかと生活記録部部长カツコウさんがつぶやく。
「でも、これで部費が決まっちゃうんでつくばい！！」

言葉の終了間近でマスクが吹き飛んで余りよく聞き取れなかった。
カツコウさんは、一帯という耳をしているのかと疑いたいが、う
んと頷いた。

「でも、万年ビリだからね。別に大したことはないのさ」

「・・・そうですか」

「・・・それでも、君達が入ってくれるというのなら・・・まだ僕
は続けるけど」

「すいません。あきらめます」

「へ？」

カツコウさんは、かなり典型的な、それこそ鼻から鼻水をたらし
て、目を丸くして、口をポカーンと開けて、というフリーズが似合
うリアクションだった。山下は追い討ちをかける。

「わだじもすいません。ズビー」

「え、ちょっと」

カッコウさんは去っていく二人の背中をずっと見つめていた。校内の放送が流れた瞬間だった。

「で、結局、ウサ男はどこ入ったんだよ」

「月見部」

「は？」

次の日の朝、山下の砲撃によって半崩壊気味の通学路を通ってやってきたウサ男に、いきなりの質問を試みた。

「月を見るんだよ。ウサ美も入った。先輩が優しいんだ」

「へえ、ヨカッタナ」

そんな俺と山下は帰宅部所属になった。期限が昨日までと言う知らなかった期限を今日の朝に、山下に言われた。ちなみに、部活動に強制的にというのは帰宅部に強制入部と言う意味が90%だったという。

これもまた知らなかった。

No.13 転校生ならば転校生らしく全クラスメイトに囲まれよ(前書き)

神キャラです。ミスです。新キャラです。趣味で書いてるので、め
ちゃくちゃキャラ増えます。

No. 13 転校生ならば転校生らしく全クラスメイトに囲まれよ

台風だか何だか知らないけれど、今年は来るのか知らない六月の梅雨時の中乃川です。

いつも通り、砲撃の音が聞こえる通学路を通り（山下と登校時間が被るため）、学校へ着いた僕の目に写ったのは信じられない光景でした。映った？ 遷った？ 鬱った？ まあとにかく。

今でも信じられません。信じたいとも思いません。校門を潜り抜けて、横に視線を移したそこに、崩壊した体育館の前に、巨大なバスが到着していたのですから。バスですよ。バスじゃないのですか？

巨大な車が止まっているのに気づいているはずの学生達はスルーして、校舎の中へと蟻の行列のように入っていきます。そろそろという擬音が聞こえてきそうです。

巨大な車に目を奪われていた僕は、さらに信じられないことに気づいてしまいました。

車にネコ耳が生えています。何ででしょうか。

そして、車のドアが開きます。自動式です。高級そうなのでそう思いました。いつの間にか、僕の周りの学生達が消えていました。

校舎の中に入って窓から見えているのでしょうか。窓から声がします。車のドアから出てきたその女子生徒は・・・スカートが目に入ったので女子生徒だと分かります。こちらに顔を向けないまま、校舎内に入っていきます。僕の目の前を通ってです。

ちなみに、校門を通ってまっすぐ行けば校舎、左に曲がれば体育館跡という校内なので、体育館後前に停めていれば嫌でも僕の目の前を通ることになります。校門に立っている僕なのですから。

というわけで、チャイムと同時に足を動かして彼女を追い越して教室に入った僕でした。

追い越しました、彼女を。

「今日から、このクラスの一員に「にやった」、えー・・・」
カリカリと言う黒板を白い棒状のもので引っかく音がする。

そこに書かれたのは「蛇旅チエシャ」。半分が完全にカタカナなのである。

「たたびちえしゃと言います。よろしくです」

「蛇旅さんは、転校生だ。分からないことが多いと思うからたくさん質問するように。席は・・・ウサ男の後ろ！　ちようど誰か休んでるしな」

「先生！　席のことはぶっちゃけどうでもいいですが、生徒をニツクネームで呼ぶのは止めて下さい」

「ウサ男君は、私のことをニツクネームで呼んで陰口をしているのではないかね！？」

「そんなことをするような生徒ではあ、ありませんよ。富士山」

「ウサ男君！！　今私の名前を富士山と呼んだな？　それは私に対するニツクネームだろう！！」

くだらない言い争いです。そんな中、チエシャさんがこちらへやってきます。

「いつもこんなにやのにやのですか？」

「え、ええ・・・たまにかな？」

僕としてはあなたの「な」が「にゃ」に変換されるのがいつもののかと、問いたい気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9110e/>

秩序現実崩壊学園

2010年11月2日02時08分発行